

入園後の幼児の集団への適応



関 口 は つ 江

はじめて幼稚園に入った多くの子どもにとって、そこでの毎日の生活はさまざまな点で今までとは全く勝手の違うことの連続であり、興味や不安や、解決しなければならぬ問題などがいっぱいにつまんで、溢れるばかりに気持の張りつめた時間であろう。

そのような状況にある「自分」の在り方を示すのに、子どもたちが実にいろいろの方法をとることはすでに幼児を受持ったことのある教師には周知の事実である。

それらの子どもを迎えた教師は一般に、まず子どもたちが早く園生活に慣れ、友だちができ、そして先生のいうことがよく守れるようになるように、いわゆる幼稚園生活への適応を早くさせるための指導計画を立てることを考えるであろう。

しかし、何もかも早く解決し、問題なく子どもの集団をまとめ行くことが最も好ましいことであるかどうか吟味する必要はな

いであろうか。

なぜなら、家庭から離れてはじめて組織化された大きな集団に入るという変化は、子どもがいろいろなことを学習するのにまたとない機会であり、この時期に子ども自身が問題に直面し、十分に探索し、試し、自らの手でつかみとって行くような場面を多く用意することによって、彼らにいつその飛躍が期待できるのではないかと考えられるからである。

特に社会的な側面については、「慣れる」ということだけを考へて、ひたすら「幼稚園というところはこのようにして、こういうことをするところ」という枠を押しつけてしまったのでは、子どもは家庭という集団に無意識に慣らされて来たように、また幼稚園というものに慣らされるだけであって、新しい人と出会い、いろいろな創造的な活動を展開して行こうとする開かれた場

としての幼稚園の機能、すなわち、子どもにとって自分たちが主体的に構成するところの「社会」としての意味が薄れてくるものと考えられる。

その点で、教師は大変であっても、園生活初期に子どもたちに十分な時間と場面を与え、段階を経て社会的な成長を促す必要があるであろう。このような観点から、以下に入園初期の適応過程の教育的意義について少しでも明らかにするためにその状況について考察してみる。

適応への要因について

まず幼稚園という集団に入ることを通して、社会的な側面から子どもの成長を促すような、いいかえれば、子どもに適応を要求するような要因にどんなものがあるかをみると、およそ次のようであろう。

①生活のルールに適應する

その一つは公式的な組織体としての幼稚園の機能に適應することであり、これには時間的な拘束、場所的な制約、その他各々の園がもっているさまざまな制約(例えばものの置場所とか、約束ごととか)にのっとって生活して行くことである。これは今までに獲得して来た家庭での生活の仕方に加えて、または一部再構造

化して、新しい場面での行動の仕方を覚えたり、同じような場面でも違った仕方で行動することを身につけることである。

例えば、母親から離れること、集まりがあれば遊びをやめると、自分の部屋で遊ぶこと、途中では帰らないこと等々。

子どもたちには、これらの制約に対応して適切に自己をコントロールすること、いろいろな場所ではいろいろな生活上のルールが存在することを柔軟に受け入れることが課題である。そして、この点については、家庭と園との格差が少なければ少ないほど抵抗なく受け入れられようが、逆にその子どもにとって生活の幅の拡大は少ないことになろうし、また格差が大きすぎれば、いわゆる不適応状態を示すことになろう。

ここでは、新しい生活では今までと何がどのように変わっているか、家庭との共通点は何か、などについて明確な認識に立たせ、少しでも新しいものを加えてやるのが大切であろう。

このような場合として、例えば次のような場合があげられる。

——母親と門のところを別れたAが園のところではぼんやり立って、他の子どもが遊んでいるのをながめている。(いつも母親から指示されて動いているAはそこで誰にも何もいわれなくても靴をはきかえるということを忘れていた。)他の子どもが来てしているのに刺激されてようやく自分もやりはじめる。先生に「Aちゃんおはよう」と声をかけられてほっとしたような顔。(しかし

識をもつ	III対人関係の発展	問題行動例(注2)
<p>例</p> <ul style="list-style-type: none"> ⊗名前をよぶと応える。 ⊗集会は先生に動かされてやっと整列。 ⊗「コップがないの」「引き出しがあかないの」 ⊗「ボク〇〇先生好き」 ⊗鬼ごっこなどはうまくできない。 <p>⊗並んであるく時前後の間隔を考える。</p> <p>⊗机毎に交替で歌をうたう。</p> <p>⊗みんなの前で生活発表をする。</p> <p>⊗紙芝居などまとまってよくみられる。</p> <p>⊗ルールを教師が提示すると鬼ごっこができる。</p> <p>⊗製作で、のりをつける人、はる人に分れたら、楽しくできた。</p> <p>⊗話し合いをすると各々勝手なことをいう。</p>	<p style="text-align: center;">III対人関係の発展</p> <p>自己依存行動</p> <p>○相互に無関係</p> <p>○身体活動中心</p> <p>物依存行動</p> <p>相互接触</p> <p>○相互依存</p> <p>○相互対立</p> <p>課題依存行動</p> <p>物中心自発行動</p> <p>例</p> <ul style="list-style-type: none"> ⊗遊具にも手を出さないのでじっとしている。 ⊗ばらばらに好きなことをするが長つづきしない。 ⊗マット遊びなどをさせると生き生きする。 ⊗はじめてのカスタネットがとてうれしそう。 ⊗ポスターカラーでの活動を楽しむ。 ⊗二人ずつ手をつなぐとよく歩ける。 ⊗おしゃべりが出てくる。 ⊗同じような遊びをしようとするので、遊具のとり合いが起こる。 ⊗「今日もお仕事か、ああよかった」 ⊗つつじ会(注1)を目的に製作がすすみ、活気が出てくる。 ⊗まだ自分からは遊ばない子がいる。 ⊗おあつまりで活動を中断するとあとがつづかない。 ⊗遊具は自由に使いこなすようになる。 	<p>A子</p> <ul style="list-style-type: none"> ○母親から離れない。 ○身仕度に20分もかかる。 ○つきっきりでいても泣いてばかりいるが、身体活動をさせると喜んでする。 <p>M男</p> <ul style="list-style-type: none"> ○登園時に、勝手に道路にとび出したりして困る。 <p>M男</p> <ul style="list-style-type: none"> ○水道で水いじりをして他の子に迷惑をかける。 <p>S男</p> <ul style="list-style-type: none"> ○我が強すぎて友だちと衝突が目立つ。 <p>S男</p> <ul style="list-style-type: none"> ○おやつ時間になっても外に出て行って戻らないで食べさせるのにこずる。 <p>S男</p> <ul style="list-style-type: none"> ○友だちとのいざこぎに腹を立て、おやつを食べない。 <p>A子</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「N男とお友だちになったの」と土管の中に二人で入りこんで楽しそうにしている。

(注1) 園全体のお店屋ごっこ五月末頃行なわれる。

(注2) A子・Iの問題 M男・IIの問題 S・IIIの問題

入園後1ヶ月の幼児の状況 (郡山女子大学附属幼稚園 4歳児の例)

	I 集団のルールへの適応	II 集団意
入園後第一週	<p>自己を位置づける</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分と物や家庭との分離と定位 ○全体の中での位置づけ ○共有物の把握 	<p>二者関係(1対1)の成立</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教師との通路がつく。(働きかけに応ずる) ○障害を通して自分から働きかける。 ○自発的な関係づけ ○行動の対象や状況が不明瞭だと反応できない。
第二週	<p>生活の枠組ができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○行動に区切りがつく。 ○枠組を積極的に受け入れる。 	<p>二者関係(1対多、多対多)の成立</p> <ul style="list-style-type: none"> ○物理的な手がかりがあれば集団的に行動する。 ○集団との一方的関係
第三週	<p>行動の拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ○行動が自由になる。 	<p>二者関係役割分化</p> <ul style="list-style-type: none"> ○行動規定が明らかであれば役割をとれる。 ○目的や課題が明らかでないときとまらない。
第四週	<p>行動様式が作られる</p> <ul style="list-style-type: none"> ○挨拶、片づけなど ○行動の早さ 	

先生は「早く靴をはきかえましょう」とは声をかけない)

——手洗いの水道の上からびよんびよん飛び下りて遊んでいるB。その危険なようすにたまりかねて注意した先生のいうこともあまり聞かえないようだ。やがて先生がBをつかまえてきつく叱るとBはきょとんとしている。(恐らく、家ではこのようなことできつく叱られたことがないのであろう)その後この危険な遊びはしなくなった。

② 集団の成員としての意識をもつ

第二は、第一の変えることのできないものへの適応に対して、相互に作り合うもの、すなわち仲間集団への適応である。そこで共に活動している多くの友だちの動きに反応し、いっしょに活動したり、自分がその集団の役割を担ったりすることで、いわゆるクラス集団の動きに適応することである。

子ども同士はやがては互に活動の対象や手段となり、また同一視や社会的な欲求(愛情や承認を求めたり、優越、支配の対象としたり)の対象ともなり相互に種々の関係を形成することになるのであるが、まず入園当初の課題は、自分の行動を他の友だちの行動や集団の課題に合わせて行くことである。この過程を通らなければ、集団の形成員としての条件に欠け、集団を維持して行くことはできなくなるからであるし、子どもの側からみれば、行動

を合わせることを通してより大きな集団と同一視し、自己拡大がはかられることになるからである。大切なことは自分と集団との関係についての洞察にもとづく適応に導くことであって、同調を強要してはなるまい。

子どもが〇〇幼稚園に入ることになった、自分は〇〇ぐみだということがわかった時に示す喜びはこの集団行動への第一歩とみられようが、これを「幼稚園では」とか「〇〇ぐみでは」と斉一化への圧力に変えないようにしなければならぬであろう。

③ 対人関係を適切にもつ

第三点は、対人行動といわれる他人への振舞い方の問題である。どのような場面でもどのように働きかければ適切な反応が得られるか、例えば対立場面では泣いたらいいのか、打ったらいいのか、先生に訴えたらいいのか、いっしょに遊びたい時に、「入れて」といえばよいのか、黙って入ったらよいのか、他の遊具を持って行くのか等々、実際の相互作用の仕方がわかるようになることである。はじめは全く自分の欲求や興味だけで行動しようとしていたものが、他人の存在に気づき、その状況を把握して、相互作用を行なうようになり、やがてその相互作用が相手の在り方に応じて適切に行なえるようになることは、幼稚園生活における基本的な学習の一つとも考えられる。しかし、入園当初の課題はま

ず他人と交渉をもつようになることであり、接触の機会をいかに段階的に用意するかが保育者の大きな問題となろう。

以上の三点をまとめれば、第一は社会性に関する「構え」または「習慣」に關係し、第二は「欲求」的側面、第三は「行動」的側面につながるものと考えられ、おのおのは各個人の中である程度は独立的なものと考えることができようであろう。

例えば、入園の日にも母親からすぐ離れ、特に手のかからなかった子どもが少したつて通園をいやがるのは、園生活の枠組にはよく適應したのだが、友だちとうまく活動できなかったからであるろうし、良く遊ぶのだけれども、一斉に何かしようとすると勝手なことばかりしているのは集団意識の欠如によるものであろう。このように指導に当たっては、どこに問題があるかを明瞭にすることによって、指導上の手がかりの一部が得られるであろう。また保育に際しては特定側面に指導が偏らないように配慮されなければならぬ。

次に幼児の状況をより具体的に把握するためにある組の入園後一カ月の経過（八頁と九頁の表を参照）を示してみた。

入園後の幼児の状態について

この例では集団に対する個人的な行動側面での適應は第三週位

でほぼ一定の水準に達し、集団意識に関しては第四週に發展性が見られるのに対して、対人關係についてはずっと遅れ、一ヶ月を経てもまだ十分な關係は成立していない。

このように他人との關係づけの發展には非常に時間がかかり、さまざまな段階や個人差がみられる。集団へ適應しているかにもえても、物や課題に向かつて一様に集まっているだけで集団成員としての意識や人との關係づけが分化して成立していないことが多いことに注意しなければならない。すなわち、初期には子どもはまず自分と物、自分と課題との關係を成立させ、それを媒介として他人と結びつくことができるが、これらに媒介されない場合は偶然的な相互の接觸に過ぎないようである。

詳細な検討を行なうのに十分な資料は得られていないが、他人との關係や対人行動が子どもの中で独立した領域となって育ち、分化した集団行動が行なわれるのは保育も後半に入ってからであるろう。

従つて、ここでみられるように、たとえ子どもたちが問題なく集団行動を行なっているようにみえてもそれで満足してはならないし、保育しやすいからといって課題中心の保育ばかりを行なっていると、対人的な發達の問題点は、ほとんど表面化されることがないために、見逃されやすいことに十分留意しなければならぬであろう。

（郡山女子大学）